

## 全国調査で見てきた秋のヒヨドリの渡りの特徴

山口 恭弘（中央農研・鳥獣害研）

ヒヨドリは私たちに身近な鳥で、日本中ほとんどの場所で1年中みることができる。その一方、春秋の渡りの時期には数羽からときには数百羽もの群れになって渡っていくヒヨドリをみることができる。留鳥でありながら渡り鳥でもある興味深い生態を持っているといえる。これまで日本各地で個別にヒヨドリの渡りを調査した例はあるものの、全国規模で調査・解析したことはなかった。

2004年の秋に、全国規模でヒヨドリの渡りの観察情報を集めたところ、北海道から九州まで、45名、78箇所の情報が集まった。総観察群数は1,974群、総観察羽数は88,221羽に及んだ。ヒヨドリが渡る時間帯を調べると朝の7時、8時台が多く、10時までの時間帯で全体の95.1%を占めた。一方、午後には0.8%と極端に少なくなり、午前を中心に渡っていることが示唆された(図1)。飛去方角を調べると南西が最も多く、ついで西、南となり、南から西までの90度の方角で全体の98.8%になり、秋のヒヨドリがこの方角に渡っていると考えられた。調査地別に方角をみると同じ調査地でもいくつかの方角に分かれるものと、1方角に限定されるものがあり、多数のヒヨドリが渡る渡りの主要ルートと考えられる調査地では方角が限定される傾向があった。ついで群れサイズに着目すると、6時台が78羽と最大でその後、減少する傾向がみられた(図1)。日本全国を10の地域に分けてヒヨドリが渡っていた時期を比較すると、北の地域より南の地域で渡りが早く開始され期間も長かった(図2)。このことは、北の地域から渡り始めた群れが日本全国を通過しながら南の地域へ行くのではなく、関西や中国などの地域内で渡りが開始することを示している。これは地域内で高標高地から低標高地への移動があるものと考えられる。

一方、2002年から3年連続で調査を行っている兵庫県宝塚市のデータでは年ごとに渡りの期間やピークの時期が異なっており、ヒヨドリの渡りの全体像を明らかにするために年変動を全国規模で調べる必要が示唆された。

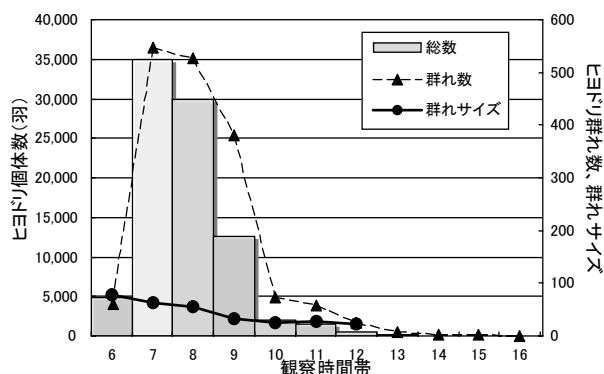


図1. 時間帯ごとのヒヨドリ観察数、群れ数、群れサイズ

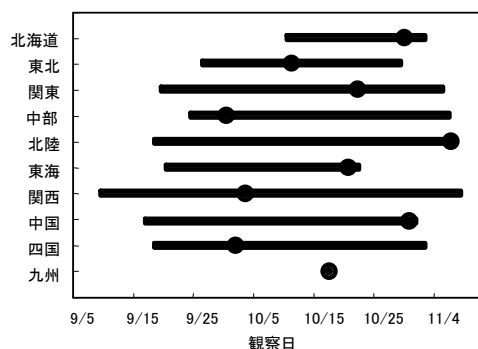


図2. 各地方におけるヒヨドリの渡り期間。  
●は1日における渡り個体をもっとも多かった日。